SATOYAMA

Volume Three

農業の今、福島の今。

細くても継続する。

顔の見える関係に風評被害はなし。

私は全てを明らかにしたいです。正しい情報を踏まえるからこそ、浪江を新しい町にしていけると思うんです。

「美味しくて健康」これが最高じゃないですか。震災前の東京と福島の関係のように、福島だからって特別視せずに、美味しいから買う。そんな良い意味で普通の関係が理想ですよね。

人生100年時代、100歳まで営農できるかなってワクワクします。

「福島」を特別視せず、人と人で繋がる

震災を経ても、消費行動の原点は不変

いつもは福島に伺っていたのですが、本日お伺いしたのは何と経済産業省のロビー!! 石井農園の代表・石井さんと二本松農園の代表・齊藤さんが自慢の農産品を持って東京に来てくれました。早速多くの人が、野菜や加工品を手にとってくれていますね。

齊藤：そうですね。東京の人々が、福島で出来たものを手にとってくれているのはとても嬉しいです。

石井：石井農園で作っているかぼちゃ饅頭「なみえのおやつ」も持ってきたのですが、あっという間に売り切れてしまいました！添加物が入っていないことに感動するお客さまがたくさんいらっしゃったことが嬉しかったです。

齊藤：石井さんは今朝かぼちゃ饅頭を作って福島から持ってきたんですよ。まさにできたてホヤホヤです。

定期的に東京に来て福島の農産物を販売している齊藤さん。東京の人の反応は？

齊藤：震災直後はもちろん米を中心に風評被害はあったのだけれども、「新鮮で美味しそうであれば買う」というシンプルな消費行動は変わらないと思いました。なので、福島のものだからといって敬遠されることは実はあまりないです。ただ、東京の人たちは福島のものを買いたいと思っても、流通側の都合で購入できないこともあります。

石井：そうですね。流通側は消費者から敬遠されないであろうものを仕入れますから、福島の農産物は避けがちです。流通リスクとなってしまいますからね。

齊藤：だからこそ、私たちはこうして農産物を直接東京に持ってきて、物理的に距離を縮めることが大切だと感じています。

石井：ここ、経済産業省のロビーで販売させてもらっているのも、各省庁に齊藤さんが手紙を送ったことがきっかけ。経済産業省からすぐにお返事を貰って今日が実現しているのだから、東京の人も福島を気にかけてくれているんだなぁと嬉しくなります。

齊藤：何が売れるかわからないのも面白いですね。東京と一口にいっても、場所によっても売れるものが違う。また、事前にしっかりアナウンスをして頂いているとスムーズに売れていきますから、そういった協力体制をとれると嬉しいですね。

石井：震災から月日はたって、もちろん風化したこともあるけれど、「福島」に興味を持ってくれている人がいることははっきりと感じます。それだけ福島で起きたことは大きなことだったから。進行中の廃炉作業の様子も時折報道もされますから、継続的に世間の人も意識するのかもしれませんね。

石井さんの故郷である浪江の名前を冠した商品「なみえのおやつ」の反応はいかがでしたか？

石井：なんと１時間で完売したんです！とても嬉しかったです。材料となる九十九里かぼちゃの栽培から、加工して饅頭にするところまでこだわって、「美味しくて安全だ」という自負があるからこそ、実際に「美味しい」と言ってもらえたことが自信になりましたね。

齊藤：そうですよね。「浪江」ということを堂々と謳っていることも前進です。福島産のものにおいて「安全」は大きなキーワードになりますが、県も放射能検査するし、我々も検査してダブルチェックすることでより高い安全性を確保しています。

正しい情報を踏まえ、新しい浪江を目指す

石井：例えば、私が育てているエゴマも、政府が定めた流通に乗せていい基準は 100 ベクレル以下ですが、私は 20 ベクレル以下のものしか出荷しません。法律的には各農家が検査をする必要はないのですが、こうしてお客さまに直接販売することもありますから、自分自身で検査して確かめてから販売します。お客さまを裏切りたくないですから。

平成 29 年には帰宅困難区域を除く区域で避難指示が解除となった浪江町。いまの現状は？

石井：数字にすると、元々の人口の２万人から 800 名が帰還しています。若い人が帰れるところではなくなってしまいました。ホットスポットといって、放射能のレベルが高いところも正直あります。除染は進んでいるけれど、終わり切ってはいない。こういったことは隠さなければいけないことだと思いがちですが、私は全てを明らかにしたいです。正しい情報を踏まえるからこそ、浪江を新しい町にしていけると思うんです。

齊藤：私もそう思います。甘くはない状況ですが、石井さんみたいな方が「頑張ってみんなでものづくりをしよう!!」って呼びかけてくれる。人々が生き生きすることが、新しい町づくりの第一歩ですよね。

石井：そうですね。原発事故が起こってから、政府が一人一人に生活費の保証を始めましたよね。必要なことだったかもしれないが、お金で全て解決したような形になってしまった。定期的に入るお金があるから、働きたがらない人も出てきてしまいます。でもそれでは生きていく意味がなくて寂しいから、「働かない？」って声をかけたりします。そうして身体を動かすと、気持ちも前向きになるから。

やっぱり「顔の見える関係に風評被害はなし」

かぼちゃ饅頭作りは、浪江の人の生きがいになっていますね。

石井：そうだといいなぁ。私自身も、かぼちゃの栽培から饅頭の加工まで、体力的には大変だけど心のストレスは何もないんです!! こうして元気で動けていることが嬉しいし、食べた人が健康になるようなものを作りたい。人生 100 年時代、100 歳まで営農できるかなってワクワクします。

齊藤：素敵ですよね。実は経済産業省の担当の方が一度福島に来られた時に、石井さんにお会いしてるんです。そこで石井さんの前向きな姿勢を見て、「この人に東京に来て欲しい!!」と感じたようですよ。

石井：そうなんですね、嬉しい。こうして人と人が繋がって、楽しく販売することで次につながればいいと思いますね。

齊藤：そう!! 継続することが本当に大切です。ご縁で始めた色々なことを、続けていくことが復興に繋がります。なぜなら農産物は継続的に収穫するものだから。細くても丈夫で長く繋がることで、福島のファンを増やしていきたいですね。

東京にいる私たちは、今福島とどう関わって行ったらよいでしょうか。

齊藤：二本松農園にも時々電話がかかって来たりします。「どうしたら福島の支えになりますか？」って。とても嬉しいことです。福島に来てくれることもとても嬉しいし、東京でこうして福島の野菜を手に取ってくれるだけでも嬉しい。「これで福島の農家さんは喜ぶな」なんて、思ってくれればいいんです。

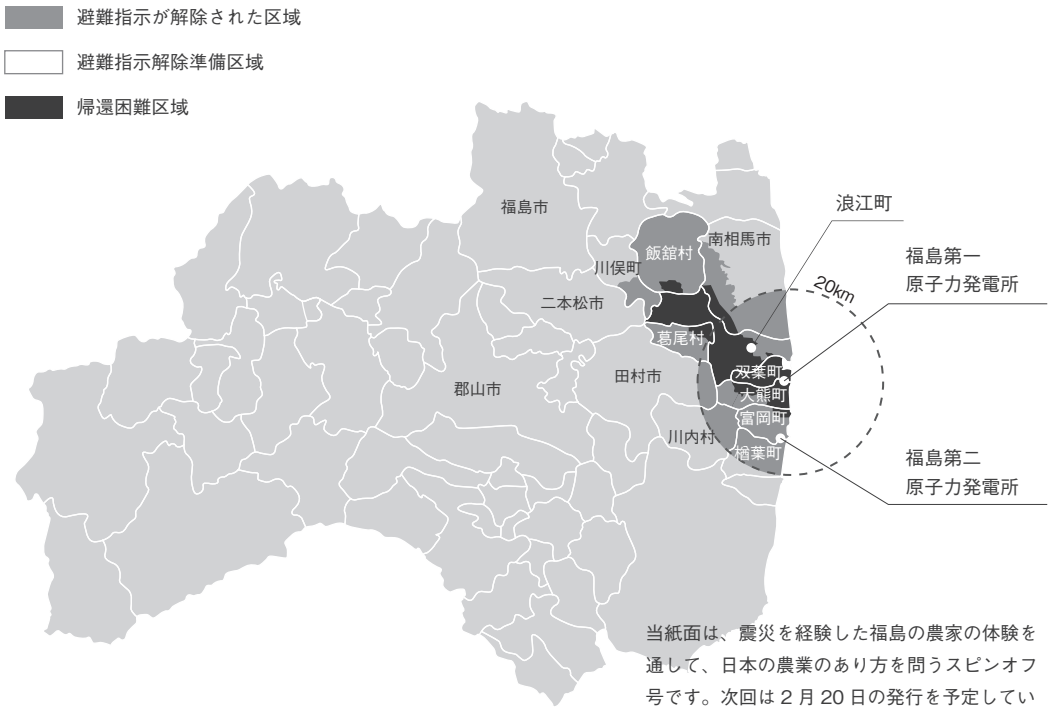
石井農園
石井絹江

×

二本松農園
齊藤登

石井：生産者と消費者がより密に繋がる関係を作りたい。あと、福島の人は安全や健康について真剣に考えているから、作っている農産物もとても健康的なものばかり。食を通して健康になってもられば、農家冥利につきますね。

齊藤：そうそう。「美味しくて健康」これが最高じゃないですか。震災前の東京と福島の関係のように、福島だからって特別視せずに、美味しいから買う。そんな良い意味で普通の関係が理想ですよね。これからも流通では叶えられない、直接消費者の顔をみる機会を増やしていくつもりです。合言葉はずっと僕の中では変わりません。「顔の見える関係に風評被害はなし」です!!



里山ガーデンファームとは

里山ガーデンファームでは、50 以上の生産者が集い、福島の豊かな地形が生む様々な野菜や果物、加工品を生産している。集荷センターなどを介さず、生産者から直接買えて届くだけでなく、生産者に会いに行って、実際に農業の体験もできる。創り手と消費者が限りなく近い、信頼関係を築ける場所。おいしさと一緒に、福島の今を知ってもらいたい。

NPO 法人 がんばろう福島、農業者等の会
〒964-0976　福島県二本松市新生町 490
TEL:0243-24-1001 FAX:0243-24-1536

当紙面は、震災を経験した福島の農家の体験を通して、日本の農業のあり方を問うスピンオフ号です。次回は 2 月 20 日の発行を予定しています。

2019 年 11 月 20 日　発行

令和元年度福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金により発行しています。